

日本、韓国と台湾におけるアマチュア野球界 とプロ野球リーグの構造の比較研究

スポーツビジネス研究領域

5017A047-1 鄭 翊宏

研究指導教員：平田 竹男 教授

【序論】

かつて、日本、韓国と台湾の学生野球チームは甲子園で共に試合を組む時代があった。それは朝鮮（現北朝鮮と大韓民国）と台湾が日本帝国の支配下に収まる時のことである。

一方、戦後北米の MLB は周辺国のプロリーグから優秀な選手を吸収し、それらは MLB へ選手を送り出すシーズンの短い冬季リーグになった。その中、東アジアの日本・韓国・台湾は MLB に影響されず、自らプロリーグを運営してきたことを確認した。

筆者はこの日・韓・台の共通点から、この三ヶ国はどのような野球システムを用い、東アジアにおいて MLB の海外展開に強く影響を受けずに発展してきたかを明らかにするとともに、この三ヶ国のアマチュア野球界及びプロ野球リーグの構造を比較することで、東アジア野球界の発展策に関する示唆を得たい。

【手法】

上記の研究目的を達成するために、本研究では以下の項目に対して、文献調査を行い、図表で整理した。

1、戦後の日・韓・台における野球史 2、日・韓・台におけるアマ・プロ野球の全

体像（各世代の野球チーム数、各世代を統括する野球組織数、アマ・プロ野球を統括する野球団体の関係図）

3、日・韓・台のプロ野球リーグの仕組み（プロ野球の組織図、リーグ運営の特徴、球団のバックグラウンド、新人ドラフトのルール、選手給与など）

【結果】

1、日本では戦前に制定された野球統制令の廃止に伴い、戦時に中止された高校・大学・社会人・プロ野球は復活し、各世代を統括する野球組織は次々と現れた。

韓国では 1946 年に青龍旗高校野球大会、1955 年に白虎旗実業野球大会を開催することで、60・70 年代に高校・社会人野球はアマの中心となった。しかし、1982 年プロ野球の開幕後、多くのアマ選手がプロ入りし、アマの人気は低落。

台湾の野球競技は 1969 年まで大きな発展がなかった。同年、台湾の金龍少年野球チームはリトルリーグ・ワールドシリーズで優勝を遂げた後、野球は国技として全国に注目されるようになった。1989 年プロ野球発足。

2、日本では、少年野球から大学世代にかけて、野球チーム数は膨大である。

企業の社会人チームと地方の独立リーグも設置されている。韓国のアマ野球は高校野球に集中する傾向があるが、近年KBOはアマ野球に対する支援を展開した。台湾のアマ・プロ野球界を統括する組織は学生野球運動連盟、野球協会とプロ野球CPBLであるが、政府機関による野球振興計画も長期的に実施された。

3、日本のNPBにおいて、基本的な権利義務は球団に帰属する。また、2004年以来、NPBが12球団体制を維持。韓国のKBOにおける放映権、スポンサーなどの収入はリーグによって管理され、その中の収益も球団に配分される。80・90年代にKBOにおける球団売却が多発したが、近年リーグの主導により、2球団新規参入した。台湾のCPBLではビジネス的な権利義務が球団に属す。また、リーグ発足時の6球団の中に、2球団のみ健在している。

【考察】

1、結果1における歴史的な経緯から、本来 MLB と地理的に遠い日・韓・台は MLB が中南米への進出に集中している間に、戦前に確立されたアマ野球の礎を元に、戦後から近年にかけて、MLB からの影響を受けずにアマ・プロ野球を発展させることができたと考えられる。

2、

日・韓・台のアマ・プロ野球界における
共通・相違点

	日本	韓国	台湾
同	小・中・高・大学世代の野球及びプロ野球が運営中		
異	多数な統括組織	プロ野球KBOは主導役	政府機関も国内野球への支援を

日・韓・台のプロ野球の仕組における
共通・相違点

		NPB（日）	KBO（韓）	CPBL（台）
リーグ仕組み	同	全チームが（1）リーグのトップ機構に属し（2）二軍持ち		
	異	チーム側主導型	リーグ側主導型	チーム側主導型
チーム	同	企業チームが中心		
	異	安定な12チーム体制	大きなチーム変遷	
選手獲得	同	新人ドラフトの開催		
	異	一回のみの 新人ドラフト	新人ドラフトが 2回実施	一回のみの 新人ドラフト
選手平均月給	異	330万円弱	125万円弱	56万円弱

3、現在、東アジア各国のサッカークラブが参加する AFC チャンピオンズリーグ（ACL）が毎年開催されている。また、近年日・韓・台のプロ選手ともが参戦する「アジア・ウィンターリーグ・ベースボール（AWB）」も毎年の年末に台湾にて開催されている。筆者は ACL と AWB を参考とした日・韓・台合同プロ野球リーグの開催を提案し、MLB より一強構図と味違う「東アジア野球圏」を築くことに導くとする。

【結論】

近年東アジアに進出しようとする MLB への対応策として、筆者は現存する AFC チャンピオンズリーグ及びアジア・ウィンターリーグ・ベースボールの試合制度を参考にし、同じく企業スポーツかつ地理的、時差的に近い日・韓・台による合同プロ野球リーグを提案した。日・韓・台には一丸となって、メジャーリーグによる一強構図と味違う「東アジア野球圏」を築くポテンシャルがあると結論づけた。